



◆歴代1位！驚きの果実肥大調査◆

栽培部では、6月1日から「ふじ」、「つがる」、「ジョナゴールド」、「王林」の肥大調査を開始しています。

調査方法は、ノギスを用いて、1品種あたり30果の縦と横の大きさを計測していきます。この作業では、同じ果実を継続して調査するため、正確に測定することはもちろん、果実を傷つけないよう、一つ一つ集中しながら丁寧に作業を進めています。



今年の生育状況につきまして、は、平年に比べて果実の肥大が非常に良く、8月1

日時点で、「ふじ」、「王林」及び「ジョナゴールド」は歴代1位、「つがる」も歴代4位の大きさとなっています。

その理由として、開花日が平年よりも8〜10日早かったこと、平年に比べて気温が高く、降水量も多かったことが考えられます。また、今年のように降水量が多く開花も早かった年は、「ふじ」では「つる割れ」の発生が多くなると予想されます。今後の対策としては、収穫作業を遅らせないことや、樹勢を強くしすぎないことが重要となりますので、適切な栽培管理を心がけましょう。

◆品質向上を目指す！ジュノハート適期収穫研修会◆

6月中旬、今年度2回目となる「ジュノハート」適期収穫・目揃い研修会研修会を開催しました。12日は県南地域の2園地、15



日は黒石市のりんご研究所ほ場を会場とし、令和8年度の「ジュノハート」の適

期収穫について、研究員が説明を行いました。研修には関係者や生産者など延べ約100名が参加し、収穫適期の判定方法や出荷規格について理解を深めました。

また、12日は普及指導員から三八地域管内の状況について説明があったほか、会場をお貸しいただいた園主さんからは、御自身の園地での生育状況について御紹介があり、参加者は熱心に耳を傾けていました。県りんご果樹課の担当者からは両日、出荷規格の変更点について説明があり、「ジュノハート」やその上位等級である「青森ハートビート」の目揃

いが行われました。

本年は、開花期の低温や強風の影響が心配されたものの、その後の天候に恵まれたことや、病害虫の発生も少なかったことから、高品質な果実が多く収穫できたと感じています。収穫期の降雨により裂果がやや増えてしまったのが残念ですが、全体的には良い年となったのではないのでしょうか。

デビューから早7年となった「ジュノハート」。最近ではスーパーやコンビニエンスストアなどでも度々見かけるようになりました。一方で、県内でもまだ食べたことがないという方も多く、県内外の消費者への更なる浸透と知名度向上が期待されます。今年手に取れなかった方は、ぜひ来年産の「ジュノハート」を食べてみてください。くださいます。



◆収穫適期を見極める！熟度調査がスタート◆



品種 開発部
では、
りんご
研究所
で育成
した品
種や、
青森県
内で普
及に移

した品種等を対象に熟度調査を行っています。調査は8月上旬頃に収穫できる「恋空」から始まり、その後「きおう」、「紅はつみ」と続いています。

この記事を書いている8月上旬は、「恋空」の調査終盤でした。7月下旬に調査した時点の「恋空」は、まだ色が入り切っておらず、甘みもなく渋みが残っていました。ですが、8月上旬の調査時には全体に色が回り、甘さも酸味もちょうどよい、とても美味しい果実に仕上がっていました。その



ため
「恋
空」は
収穫適
期に達
したと
判断し
、調査
を終了
しまし
ました。
熟度調

査はこの後も、品種を替えながら11月中旬頃まで続いています。

◆100年の歴史！防除暦と病害虫を学ぶ◆

青森県りんご協会主催の「りんご繁塾」が開講し、受講生36名を対象に病害虫管理部の研究員が講義を行いました。

本年度第1回目となった5月22日(金)は、春季の病害虫の生態と防除方法について講義と圃場観察を実施し、第2回目の6月11日(木)は、農薬の作用機作と耐性・抵抗性発達のメカニズム、第3回目の7月15日(水)は、土

壌病害とマイナー害虫について。



それぞ
れ詳し
く解説
しまし
た。
りん
ごは、無
農薬で
はほと
んど収
穫がで
きなく
なっ
てしま
うため
、病害
虫の生
態を理
解

し、適切な農薬散布や耕種的防除を行うことが非常に重要となります。りんごに被害を与える病害虫は種類も生態も様々ですが、これらを効率的かつ効果的に防除できるよう、薬剤散布や耕種的防除法などを体系的にまとめ、た「りんご病害虫防除暦(以下、

防除暦)が作られています。青森県における防除暦のはじまりは、なんと1918年(大正7年)です。戦時中などを除き、10年以上も更新され続けてきました。

病害虫管理部では、様々な場面での講義などを行い、最新の知識をお伝えするとともに、防除暦を時代に合わせて進化させ、りんごの安定生産を支えています。

◆編集後記◆

第11号は、いかがでしたでしょうか。果実の肥大状況や各種研修会、熟度調査の現場など、夏の出来事をお届けしました。特に、記事の中でも御紹介した「防除暦」は、今や現場に欠かせないツールとなっていますが、毎年変化する気候や病害虫の発生状況に合わせて、研究員が膨大なデータに向き合い、試行錯誤を重ねて更新し続けており、こうした日々の研究や作業で、皆様の安心な栽培を陰で支えています。今後現場に役立つ情報を丁寧にお届けしてまいりますので、次号も御期待ください。